〈特集1　運命と偶然〉

運命と偶然の彼方?——道元の「有時」の思想——

ラジ・シュタイネック

鎌倉時代の初期に公家の別室の息子として生まれた道元は、幼年期に母と死別、一三歳で家を去り出家したあとも、出家先だった比叡山延暦寺に留まらず、延暦寺から明菴栄西が禅の修行を取り入れた建仁寺に移り、そこからさらに宋に渡り、やがて天童山の如浄禅師の認可をえた。一二二七年に帰国してしばらく建仁寺に戻ったが、一二三一年から京の南の宇治に庵を開き、弟子を集め、一二三三年から寺院の創設に努めて、一〇年のうちに活発な禅寺を築き上げた。しかし、比叡山からの圧迫や彼の主な後援者であった近衛家内部における変化もあり、一二四三年に京から越前に移り、のちの永平寺を開いた。そこで弟子達の指導に専念しようとした彼は、一二四七年の秋に鎌倉に呼ばれ、翌年の春に永平寺に帰った。一二五二年から重病の兆しが著しくなり、一二五三年の夏に療養のために京に戻ったが、数週のうちに逝去した。[1]

　間違いなく波乱万丈の人生を送った道元だが、それでも「運命」や「偶然」という思想を積極的に駆使することはなかった。さらに探求すれば、彼は人間の行為に無関係なる「運」やそれと表裏一体である「偶然」の思想を基にする考え方を「自然外道」や「天然外道」として強く批難した。一方、そうした彼も、「運命」と「偶然」の言葉が暗示している問題群を無視することはできなかった。二〇世紀以来彼の「時間論」として哲学者によく読まれている『正法眼蔵』「有時」の巻は、よく見れば、この問題群への道元なりの対応として理解できる。この巻のタイトルをもなす「有時」という言葉が、「有る」と「時」の字からなっている熟語で、道元はそれを「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。」の名句で説明している。タイトル、またこのような名句からしても、哲学者にハイデッガーの『存在と時間』を連想させたことは不思議ではないだろう。[2]また、そういう連想もあって、本巻を「時間」と「存在」の関係を説くもの、またそれを同一視するものとして読むことも理解できないわけではない。田辺元の『正法眼蔵の哲学私観』が有名な一例であるが、「有時」の概念を「時めき」

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd 29　2022/05/24 8:56

の概念と結びつけた大森荘蔵の『時間と存在』の例もある。[3]

しかし、『正法眼蔵』に集められた道元から親近の弟子達への教えの目的は、「仏道」という、仏教から見た正しい生き方への指導であり、いわゆる客観的な存在論の説明ではない。[4] 以前河村孝道が指摘したように、「有時」の巻の中心にある問題も、「時間とは何か」、「存在とは何か」という形而上学的または存在論的な問いではない。[5] 修行者と仏祖または「今」の修行と「後」の輪廻あるいは「今」の修行とその目的である成道・得道の関係の問題である。この問題の背後には「運命」と「偶然」からの問いかけが横たわっている。これが本発表のテーゼである。

ここでまず、道元が「天然外道」・「自然外道」などの名でどのような「運命」と「偶然」の思想を批判したかを議論する。その上、この批判にもかかわらず残っている「運命」の思想からの問いかけを確認し、「有時」の巻をこれらの問いかけへの道元からの返答として読み解く。「有時」のコンセプトを「運命」の思想への答えとして読むことによって、それが内包する時間の諸要素の意味と総合関連を浮き彫りにし、道元のいわゆる時間論を「運命」と「偶然」の彼方にある思想として解釈する。

一 道元の「自然外道」・「天然外道」などへの批判

道元の著作中、最初の教義的なものはいうまでもなく一二三一年に執筆された「辨道話」である。かの著作の中で、道元は仏道の修行、特に坐禅は悟りと均一であることを述べた上、一八問答の中にこの「修証一等」の教えに対する幾つかの疑問と異論を取り上げてそれを論破している。一八問答中、第一〇問答では、彼はいわゆる心常相滅論、つまり、精神が恒常で、身体だけが崩壊するという思想を問題にしている。心常相滅論が提示する精神とは、人間の中にある「心性」ともいい、一方は思慮分別を司るものであって、もう一方は、生死輪廻に無縁なる「性海」に属するものである。つまり、人間のこころ、人間の認知力を司る精神は、人間の行為と経験に一時的に動かされていても、もとよりそれとは無関係であるとされている。この「心性」にとって、これらのことはまったくの偶然に過ぎない。よって、心性に覚醒された人間も、心性への覚悟さえ保てば、その影響を絶ち、やがて生死輪廻から離脱できる。この心常相滅論の見解を道元ははっきりと「外道」として批難し、「仏道」の範囲から除外している。彼がそこで問題にするのは、まず、心と体の二元論であるが、さらに、生死と涅槃を分別する見解も外道として排除している。つまり、仏教で聖なる理想的な状態として措定されている涅槃は、生死と無関係で別次元にあるものではなく、生死輪廻の中に見出すべきものである、と道元はいう。[6]

この両面――つまり、心身二元論と生死涅槃分別論――の関係は例えば、一二四二年の『正法眼蔵』「身心学道」の巻により明確になる。この巻で道元は今回身体の方から同じ問題を取り上げて、「眞實人體」という表現を倫理的行動パターン、仏教僧の三宝への帰依と出家・修行の三つの条件に結びつけて、「自然外道」から区別する。[7] ここでいう「自然外道」は明らかに、人の身は自ずから仏である、という見解である。「辨道話」の心常相滅論批判と同

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd 30 2022/05/24 8:56

じように、人間の行動と無関係なる聖の次元の措定が、一番重大な誤謬として批難されている。

「自然」の思想に基づく「外道」への批判はまた、「身心学道」より一年はやく執筆された『正法眼蔵』「仏性」の巻にも含まれている。しかし、ここでの問題の有り様は少し違う。つまり、今回は「仏性」という、悟りの可能性の自動決定論的な見解が批難の対象になっている。「仏性」という聖なる本性があって、生きとし生けるものに備わっており、そしてそれは自然に熟成し、時間が至れば悟りとして露になる、という見解である。この見解を道元は「天然外道」と称している。(8)

この「天然外道」の「仏性」のコンセプトと問題点は「辨道話」の「心常相滅論」や「身心学道」の「自然外道」のそれと微妙に異なる。しかし、「心常相滅論」と「自然外道」や「天然外道」も、聖なるものの現実は人間の行動と無関係であることに共通している。すると、聖なるものの方から、無明の人生の苦しみと営みがただの偶然で、聖なるものへの覚悟を得た人も、今までの人生を聖なるものから隔離した運命として受け付けるしかない。「天然外道」の場合はそれに重ねて、「仏性」という聖なるものの、自分における実現を運命として待たざるを得ない。これらの見解に対して、道元は彼の「修証一等」の考えを推して、人は修行すれば必ず「仏性」が現れる、悟りを得ることが出来ることを強調する。

二　のこった「運命」の問題

ここまで聖なるものが「天」などの他所の力、または「自然」という、内面的な流動性により、人の行動と無関係に実現される考え方を道元が強く否定したことが確認できた。また、「正しい仏教」を掲げた道元は人生の行方を縁起によるものとして捉えたこともいうまでもない。それは『正法眼蔵』「三時業」の巻において彼が具に説いている。人が生まれてくる環境、人生の中に起こる諸事などは、過去の輪廻に集められた業（カルマ）の結果である、と。すると、これらのことはただの偶然でも、他所の力による運命でもないのが明らかである。(9)

しかし、だからといって、こうして「偶然性」と「運命」の考えを積極的に拒んだ道元も、畢竟してこれらのコンセプトからの問いかけを避けられなかった。この問題は、『正法眼蔵』の中のもう一つの「天然外道」批判の箇所を見ればよくわかる。「自證三昧」の巻において、道元は次のように言う。

「自證自悟等の道をききて、麤人おもはくは、師に傳授すべからず、自學すべし。これはおほきなるあやまりなり。自解の思量分別を邪計して師承なきは、西天の天然外道なり、これをわきまへざらんともがら、いかでか佛道人ならん。(10)」

これは、いわゆる「正師」、つまり正しい指導者なしでは、仏教の正しい理解が得られない、ということである。しかし、そうすれば、このような正しい指導者に会えない人はどうなるだろう。もしも、仏典などにより、正師との縁がない状況は前生の業によることだと理解しても、この業を今の人生の中では運命として受け入れるしかないだろう。もう少し問題を大局的にアプローチすれば、次のようなことがいえよう。仏教は必ずしもこの世に存在しない。

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd 31　2022/05/24 8:56

人も必ずしも、仏教が繁栄している環境に生まれてこない。だとすると、ある人はなぜ、仏教に出会えるのか、または別の人はなぜ仏教に出会う機会に恵まれないのかという問いが出てくる。または、仏教と出会えたとしても、仏教を理解する・仏道を実現する力量があるか、ということも問題になる。そこで、仏教に出会えた人に、この出会いはどのような希望をもたらせるかという問いがうまれる。以上の問いはすべて明らかに「運命」と「時間」のコンセプトに深い関わりを持っている。

三　「運命」の問題と「有時」

ここまで述べてきたことを念頭に置きながら『正法眼蔵』「有時」の巻を読めば、先ず目に留まるのは、道元がここで二つの誤った見解を取り上げていることである。この二つのいわゆる対立命題に対して、彼は「有時」の概念を立てて、時間の本当の有り様を説明している。「有時」の時間論の総合的な解釈はこの小論の範囲をはるかに越えるが[11]、「有時」の議論の全体構図は下のように図式化できる。

この図式でいう対立命題は少し詳しく述べれば次の様なものである。

（1）時間は過ぎ去るものであって、物事は時間とともに過ぎ去る。[12]

（2）ゆえに、今の我は過去の我とも、将来の我とも別のものである。したがって、今不完全な修行で悩んでいる者も完全に悟っている仏祖とまったく別のものである。[13]

「有時」の議論の構図

議論の要因	主題項目	文章項目 （『全集』の頁・段落）
対立命題	事物は個別的で時間から区別されている。 時間は経過するのみ。 凡夫の状態は仏・菩薩の状態から離脱して、格別にある。	190・3
命題・断定	1）存在するものは時節としてある。 2) 一回起こった時節は完全になくならない。今の時節は過去・未来を内包する。 3) 故に、今の凡夫は諸仏祖から離脱して個別にあるではなく、諸仏祖と一如の状態にある。	189 〜 190・1 190・3 〜 191・1 191・3 〜 192・1
論証	河を渡って山に登る比喩は、過去が単に過ぎ去っているものではないことを解き明かす。	190・3 〜 191・2
支え	a）肯定的支え：時は一向に経過するだけではなく、「経歴」として錯綜した動きを示す。この動きの全体を顕現するものとしての現在には、すべての時間が内在する。 今、修行で迷っている凡夫の時節も、仏・菩薩の発心・修行・菩提の一位としてあるので、仏・菩薩と同時にある。 b）否定的支え：時は単に過ぎ去るものであれば、隙がであるはずである。また、その場合、成道・涅槃も一時のものになるはずである。	191 〜 192・3
安定化する要素	時のイメージ・形態：時は風のように一方向に過ぎるものではなく、春・夏のようなものである。 薬山・大寂の公安による支え	192・4 193

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd　32　2022/05/24　8:56

この二つの命題の背後に横たわっている基本見解はいうまでもなく、存在者と時間を分別する見解にある。

「運命」と「偶然」の問題群からこれらの対立命題を見れば、次のような見解にたどりつく。

（1′）我にとって、時間の経過は偶然であり、ゆえに、過去にあった我とそれがやったこと、経験したことも偶然である。

（2′）今、悟りを得ていない迷っている我は、運がよければやがて将来に悟って仏祖の位にあがるかもしれないが、そうしたことは、今の迷いと修行とは関係なく起こるだろう。

これらの見解を追求し先にあげた仏教や正師の所在だの、個人の力量だのの問題に当てはめれば、こうした縁の所在もまた偶然であって、運命と受け入れるしかないという結論に達する。特に末法の思想が盛んであった鎌倉初期の時代では、こうした見解は絶望につながりかねなかったということは想像に難くない。

以上の対立命題に対して、道元は、

（1）「有時」の概念を立てて、すべての存在者は時節として見るべきであることを説いている。これは、対立命題の背後にある存在者と時間を分別する見解に反対する教えである。「有時」の巻には次のように書かれている。

「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身これ時なり、時なるがゆゑに時の荘厳光明あり。[14]」

（2）「時間が経過する」見解に対して、彼は時間の動きを「経歴」と「法位」の概念で説明している。「経歴」は、時間の中の諸時節（存在者）が区別しながら連なっている面を表している。この連なりの背後には、縁起と因果の働きがあるから、過去・現在・未来はそれによってつながっている。つまり、時間はただ単に過ぎ去るものではなく、過去と現在の人の行動は、将来の因縁を呼び起こすもので、時間は経過する面とともに到来する面をも持っている。なお、この経歴の連鎖の中で、各時節はその位を保ちながら、そこから見た過去と未来とのすべてとつながっている。このいわゆるスタティックな視点を道元は蓮華経の「法位」の概念で表している。[15]

（3）なお、「法位」の概念が表している全体とのつながりを推して、道元は各時節に、時間の全体が内在することを説いている。このことを彼は「而今」の言葉で表現している。各時節、というのが各存在者が「而今」として時間の全体を、つまり存在者の全体を内包するので、今不完全な修行で迷っている者も仏・菩薩と不可分にある。[16] なおかつ、彼の今の修行は仏の発心・修行・得度の中の一法位と見るべきで、時間の経過の中で将来の悟りにつながりながら、仏・菩薩が歩んでいる道とシンクロナイズしている。[17]「法位」と「経歴」に密接している「而今」の思想は、こうして「運命」の思想が起こしやすい絶望を妨げ、修行者に強い希望を与えるものであるといえよう。一見にして矛盾に見える「経歴」・因果の連鎖の思想と「而今」・全体同時性の思想は実はすくなくともこの「運命」と「偶然」の問題から見て、表裏一体のものとして考えなければならない。

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd 33 2022/05/24 8:56

四　結び：「有時」から「運命と偶然」を考える

今までの要点を纏めれば、道元が「有時」の概念で表している思想の根本的な指摘は、あらゆる時は、時間の全体とのつながりを内包し、仏・菩薩の時間とのシンクロニーにあるので、迷っている時も、悟っている状態も、そのシンクロニーの中の一時節として見るべきである、ということになろう。今の状況が如何であっても、これをこの仏・菩薩の時間とのシンクロニーを積極的に生かす切っ掛けとさえ捉えれば、それが直接に得道、つまり仏道の完全なる実現に繋がっていることになる。こういう風に、道元は「有時」の思想を通じて、彼が指導した修行者達に強い希望を与えようとしたと考えられる。仏道はあらゆる意味での「運命」とは関係なく、あらゆる時に実現すべきものである。逆にいえば、聖なるものは人間にとって、偶然に、例えば神の寵遇として与えられるものではなく、人間の行為によって常に実現し得るものである。そういう意味では、道元の「有時」の思想は、「運命」と「偶然」からの問いかけに応じながら、思想としての「運命」と「偶然」の彼方にあるといえよう。

（1）以上は、主に中世古の道元の伝記の史学研究に基づく。中世古祥道『道元禅師伝研究』国書刊行会、一九七九年。中世古祥道『道元禅師伝研究・第二刷』国書刊行会、一九七九年。中世古祥道『新道元禅師伝研究』国書刊行会、二〇〇二年。

（2）日本哲学における道元の受容に関しては、辻口雄一郎『正法眼蔵の思想的研究』北樹出版、二〇一二年、二〇二―二七七頁などを参照。

（3）田邊元『正法眼蔵の哲学私観』岩波書店、一九三九年、六二―六三頁。大森荘蔵『時間と存在』青土社、一九九四年、二〇―二一頁。

（4）道元の「仏道」と哲学の差異については小論 Raji C. Steineck, "A Zen Philosopher? – Notes on the Philosophical Reading of Dōgen's Shōbōgenzō," Eds. Steineck, Raji and Weber, Ralph, *Concepts of Philosophy in Asia and the Islamic World*, Leiden, Boston: Brill,2018, pp.577–606 を参照していただきたい。

（5）河村孝道「正法眼蔵『有時』について――仏性の問題との関連に於いて」『宗学研究』三、東京曹洞宗総合研究、一九六一年、一一九頁。辻口、前掲書、一七一―一七二頁も参照。

（6）大久保道舟『道元禅師全集』筑摩書房、一九六九年（以下は『全集』で省略する）、七三八―七四〇頁参照。

（7）『全集』上、三九頁参照。

（8）『全集』上、一六―一七頁参照。

（9）『全集』上、六八二―六九一頁参照。

（10）『全集』上、五五五―五五六頁。

（11）二〇〇〇年までの解釈史に関しては角田泰隆「道元禅師の時間論研究」『仏教論集』八、駒澤短期大學佛教論集、二〇〇二年、一八七―二〇四頁を参照。二〇〇〇年以来の研究の中では頼住光子『道元：自己・時間・世界はどのように成立するのか』日本放送出版協会、二〇〇九年、八五―一一〇頁と辻口、前掲書、一六一―一八三頁が特に一読に値する。

（12）「有時」の次の箇所を参照。「時は飛去するとのみ解會すべからず、飛去は時の能とのみは學すべからず。時もし飛去に一任せば、間隙ありぬべし。有時の道を經聞せざるは、すぎぬるとのみ學するによりてなり。」『全集』上、一九一頁。

（13）「有時」の次の箇所を参照。「しかあるを、佛法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のことばをきくにおもはく、あるときは三頭八臂となれりき、あるときは丈六金身となれりき。たとへば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなりと。いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎきたりて、いまは玉殿朱楼に處せり、山河とわれと、天と地となりとおもふ。」『全集』上、一九〇頁。「この時、この有は、法にあらずと

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd 34　2022/05/24 8:56

學するがゆゑに、丈六金身はわれにあらずと認ずるなり。われを丈六金身にあらずとのがれんとする、またすなはち有時の片片なり、未證據者の看看なり。」『全集』上、一九一頁。

(14)『全集』上、一八九頁。

(15)「有時」の次の二箇所を参照。「有時に經歴の功德あり。いはゆる今日より明日に經歴す、今日より昨日に經歴す、昨日より今日に經歴す。今日より今日に經歴す、明日より明日に經歴す。經歴はそれ時の功德なるがゆゑに。古今の時、かさなれるにあらず、ならびつもれるにあらざれども、青原も時なり、黄檗も時なり、江西も石頭も時なり。自他すでに時なるがゆゑに、修證は諸時なり。入泥入水おなじく時なり。いまの凡夫の見、および見の因緣、これ凡夫のみるところなりといへども、凡夫の法にあらず、法しばらく凡夫を因緣せるのみなり。この時、この有は、法にあらずと學するがゆゑに、丈六金身はわれにあらずと認ずるなり。われを丈六金身にあらずとのがれんとする、またすなはち有時の片片なり、未證據者の看看なり。いま世界に排列せるむまひつじをあらしむるも、住法位の恁麼なる昇降上下なり。ねずみも時なり、とらも時なり、生も時なり、佛も時なり。この時、三頭八臂にて盡界を證し、丈六金身にて盡界を證す。それ盡界をもて盡界を界盡するを、究盡するとはいふなり。」『全集』上、一九一頁。「經歴といふは、風雨の東西するがごとく學しきたるべからず。盡界は不動轉なるにあらず、不進退なるにあらず、經歴なり。經歴は、たとへば春のごとし。春に許多般の様子あり、これを經歴といふ。外物なきに經歴すると參學すべし。たとへば、春の經歴はかならず春を經歴するなり。經歴は春にあらざれども、春の經歴なるがゆゑに、經歴いま春の時に成道せり。審細に參來參去すべし。經歴をいふに、境は外頭にして、能經歴の法は東にむきて百千世界をゆきすぎて、百千劫をふるとおもふは、佛道の參學、これのみを專一にせざるなり。」『全集』上、一九二頁。

なお、「経歴」の概念の解釈に関して、学者の意見が分かれているが、ここで紹介している見解に関しては小論 Christian Steineck, "Time is not fleeting: Thoughts of a Medieval Zen Buddhist," KronoScope 7, 1, 2007, pp.33–47 を参照していただきたい。

(16)「有時」の次の箇所を参照。「三頭八臂はきのふの時なり、丈六八尺はけふの時なり。しかあれども、その昨今の道理、ただこれ山のなかに直入して、千峰萬峰をみわたす時節なり、すぎぬるにあらず。三頭八臂もすなはちわが有時にて一經す、彼方にあるににたれども而今なり。丈六八尺も、すなはちわが有時にて一經す、彼處にあるににたれども而今なり。」『全集』上、一九一―一九二頁。「而今」のコンセプトは一種の時間の可逆性を内包するが、詳しい議論は別の論考に譲る。

(17)「有時」の次の箇所を参照。「いま世界に排列せるむまひつじをあらしむるも、住法位の恁麼なる昇降上下なり。ねずみも時なり、とらも時なり、生も時なり、佛も時なり。この時、三頭八臂にて盡界を證し、丈六金身にて盡界を證す。それ盡界をもて盡界を界盡するを、究盡するとはいふなり。丈六金身をもて丈六金身するを、發心修行菩提涅槃と現成する、すなはち有なり、時なり。盡時を盡有と究盡するのみ。さらに剩法なし、剩法これ剩法なるがゆゑに。たとひ半究盡の有時も、半有時の究盡なり。たとひ蹉過すとみゆる形段も有なり。」『全集』上、一九一―一九二頁。

（ラジ・シュタイネック、日本思想史・文化哲学、チューリッヒ大学教授）

1_5_比較48_特集1_シュタイネック氏.indd 35 2022/05/24 8:56